じれったい

菅田　忠志

シルバーカレッジも今は夏休み。ときどきクラブ活動に出かけ、体育館で汗をかいてくるのも楽しく気持のよいものだ。

この日は、卓球用品メーカー専属のプロのコーチが来て指導してくれることになっていたので楽しみに出かける。紹介されたコーチは、最近まで世界の舞台で活躍していた選手だったそうだ。

さすがトップクラスの技はすごい。模範試合で飛び出すスピードと多彩な技に、観戦していた部員の間からは「ウォー」「すごーい」と驚きとため息が口をつく。

その後、ひとり5分程度のコーチを受けるが、まあこれは体験だけで終ってしまうもの。

約3時間の部活を終え帰宅。べとべとの汗を流し、咽喉をうるおすビールの味のうまいこと。

そんなささやかな幸福感にしたっているとき、遠くから聞こえてくるサイレンと鐘の音。

「救急車はよく通るけど、消防自動車は珍しいなあ」と、半分聞き流しながら飲んでいたが、どうも段々近づいてくる様子。

「あれ？　この団地に入ってきたんか？」

「そうみたいね…。いや～　近いみたいよ」

驚いて飛び出してみる。なんとすぐ近くからもうもうと真っ黒い煙が上がっている。

「すぐそこや！」と言い残して駆けつける。

道路一本隔てた7軒先のSさん宅だ。消防自動車の回りを忙しく動き回る消防士。まだ水は出ていない。隣のTさんの主人が庭の散水ホースで必死に水をかけているが、放水というにはあまりにも頼りなく、歯がゆいものだが、今の段階ではこれが精いっぱいの消火活動だ。

「何か手伝いを…」と言って庭に飛び込んだが、何ができるというのだ。足元にある鯉の池に目がゆき、

とっさに「バケツ！」と大声を出す。手元に届いたバケツに池の水を汲み、何度か煙の方向になかば投げ捨てるように放ってみるが、焼け石に水を地でゆくようなもの。

「放水をはじめます。危険ですから我々に任して退避してください。」

やっと本格的な消火活動が始まるのだろう。「早よう　早よう…」と頼んでTさんと共に退避する。

「水の出が悪い！」「あっちから引いて来い！」消防士たちの会話に気が気ではない。なんとじれったいことか。やがて、新建材のものと思われる異臭を漂わせながら、真っ黒い煙の中にも火の手が見えだし、火の勢いが増したことを告げてきた。

「早く　早く！」

後から駆けつけた消防車数台のホースと共に、5，6本のホースから本格的な放水が始まったのを見て一瞬ほっとする。いや、ほっとできるのは当事者でないからで、ここ数軒の方たちの心境は息も詰まる

思いだろう。

少し離れたところで、近所の奥さんに抱きかかえられながら立ちすくんでいたTさんの奥さんの「何も持ち出してない～」と叫ぶ悲壮な声に、近所の奥さんが「こんな時は、通帳もはんこも無くてもなんとかなるから…。それより早く消えるのを祈っとこ…」

私は、不思議と比較的まじかで消火作業を見ていたので、「おばさん、大丈夫。消防士さんが《絶対に延焼は食い止める》と頑張ってる…」と、さも会話でもしてきたようなことばが、その場での精いっぱいの慰めとして口に出た。

一時は「延焼」もありえた勢いだったが、消防士たちの懸命の消火活動が効を奏したのか、Sさん宅の全焼だけで鎮火した。

あの放水が始まるまでのじれったさ、道路を横切る電線や電話線に、はしご車が満足に伸ばせないでいるじれったさ。

火は怖い。何もかもが灰になる。我家から火を出したときを想像するとぞっとする。

これは、先日（平成一七年八月十日）近所で発生した火災の体験話です。